

## ウィリスと高木兼寛

松田 誠

慈恵医大生化学講座教授

Dr. William Willis and Dr. Kanehiro Takaki

Makoto MATSUDA M. D.

Professor of Biochemistry, The Jikei University School of Medicine

### 南極大陸に「高木岬」

南極大陸の地名に Takaki Promontory 「高木岬」というのがある。昭和34年英国の南極地名委員会によって高木兼寛（1849-1920）を顕彰して命名された岬である。その説明には「日本帝国海軍の軍医総監・高木兼寛男爵は、1882年食事の改善によって脚気の予防にはじめて成功した」と書かれている。「高木岬」一帯には著明なビタミン学者5名の名前がつけられている。「高木岬」のほか「エイクマン岬」「フンク氷河」「ホプキンス氷河」「マッカラム峰」などである。この中の何人かはノーベル生理学医学賞を受賞している。

日本国内とちがって欧米では、高木兼寛は「ビタミン研究の開拓者」として日本のどの栄養学者、ビタミン学者よりも圧倒的に高い評価を受けているのである。



高木兼寛（1849-1920）

薩摩藩の郷土。戊辰戦争に軍医として従軍。維新後、鹿児島医学校で英医・ウィリスに師事。1873年、海軍軍医となり、1875-80年、英国セント・トーマス病院医学校に留学。81-82年、成医会講習所（現慈恵医大の前身）、有志共立東京病院（現慈恵医大付属病院の前身）などを設立。83年、海軍の兵食改善（麦飯）を断行し、脚気の撲滅に成功。85年、海軍軍医総監、1905年、男爵となり、麦飯男爵といわれる。

高木が活躍した明治10年以降の日本では、医学界全体がドイツ医学的傾向、とくに研究至上主義的傾向が強く、東京大学はその中心になっていた。高木が提出した「脚気は栄養の欠陥で起こり、これを改めれば治せる」という学説にしても、現実には驚異的な成果をあげていたにもかかわらず、東京大学のような権威ある研究室でやった研究でないかぎり信用するに足りないとして黙殺されつづけたのであった（この大学では「脚気は細菌によってうつる伝染病である」という考えが主流であった）。高木が日本において栄養学者、ビタミン学者として著明でないのはそのためである。

欧米では、日露戦争勝利の翌明治39年（1906）高木が英国で行なった特別講演「日清、日露戦争の勝利は、私の兵食改善によって脚気を撲滅したことにあった」を聞いて、その先駆性に驚いたのであった。講演が国際医学雑誌 Lancet に掲載されたため、欧米の医学者、栄養学者に与えた衝撃はさらに大きくなった。脚気のビタミン学説がでる20年以上も前に、脚気の原因として栄養の欠陥を考え、食事を改善することによって、この病気を根絶した日本人がすでにいたことが衝撃だったのである。

国民病といわれたほどの脚気を、ただ一人の医師で、その原因の解明から予防法、治療法の確立までやってのけることなど、いつの時代でもめったにあるものではない。高木が世界的学者5人の一人として顕彰されたのも極めて当然だったのである。

### 高木兼寛の生い立ち

高木は幼名を藤四郎と呼ばれた。嘉永2年（1849）9月15日、日向国東諸郡穆佐村白土坂の生まれである。家は代々薩摩藩士であったが、武士といってもごく下級の武士（郷土）で、へいぜいは大工で生計を立てていた。藤四郎は生来病弱であったため、母はいつも「お前は体が弱くて、ふつうの人のように家業を継ぐことはできない。なんとか学問を身につけ、学問で身を立てねばならない」と言い聞かせた。薩摩の風習とは違って、両親とも教育には大変熱心であった。元来、薩摩藩では伝統的に教養主義を喜ばず、武士たるもの卑怯なふるまいをせず、気節が高く、あくまでも勇敢であれば、もう学問などはほどほどでよいとされていた。

さいわい、藤四郎は勉強することは人一倍好きであった。7才になったとき中村敬助（尊皇の浪士）の塾に入り、四書五経を学んだ。先生にほめられると、それがうれしくて、いくらでも勉強した。先生の出した問題を夜通し考えて、やっと解けたときの満足感を晩年まで忘れなかった。

9才のころから示現流の剣法を習った。示現流というのは薩摩独特のもので、一刀必殺の剣法であった。この剣法を習いだしてから藤四郎の身体は見違えるほど丈夫になり、また彼の精神も岩根のようにたくましくなった。

12才になった時、藤四郎は中村先生に医者になりたい旨を打ち明けた。多くの村人から尊敬されていた穆佐村の黒木了輔という医者（漢方医）に憧れていたのである。家業を継ぐことが当時の常識であったから、この告白は彼にとってはかなり勇気のいることであった。中村敬助は、かねがねこの頭のよい少年をこの村で朽ち終わらせるのはかわいそうだと思っていたので、さっそく地頭の毛利強兵衛に相談に行った。毛利も前々からこの利発な少年をなんとか中央に出してやりたいと考えていたので、二人の意見は完全に一致し、父親を熱心に説得した。父親は家業を継いでほしかったのであろうが、二人の熱い説得に屈服せざるを得なかった。

いろいろの事情で医学の就学はおくれたが、17才のときようやく鹿児島に遊学することになった。蘭方医・石神良策に師事することになったのである。地頭の毛利は鹿児島の自宅（西田町）を藤四郎の下宿に提供した。

しかし、就学してまもなく戊辰戦争が始まったため、彼は学半ばにして薩摩藩の軍医として出征せねばならなくなった。彼はそのため、この戦場で医術の未熟さを痛切に知らされることになった。これは何も高木だけの問題ではなく、実は薩摩藩医全体の問題であった。薩摩藩では軍医の大部分が漢方医であったため治療に過ちが多く、そのほとんどが戦傷者の役には立たなかったのである。

### ウィリスとの出会い—英国医学事始め—

薩摩藩では戊辰戦争の経験にこりて、洋方医学の重要性をみとめ、藩立の鹿児島医学校（鹿児島大学医学部の前身）を開設した。高木兼寛は、もう一度勉強しなおすしかないと考え、ひとまずこの医学校に入学することにした。

高木にとって大変幸せであったのは、間もなく英医・ウィリス（William Willis, 1837—1894）がこの医学校の校長として赴任することになったことである。ウィリスは、戊辰戦争の時の功勞によって一度は医学校兼大病院（東京大学医学部の前身）の院長に就任したものの、この大病院では以後ドイツ医学を導入することになったため、鹿児島の医学校に去ることになったのである（明治2年12月）。

鹿児島医学校ではさっそく職制をさだめ、本科（原語科—4年制）、別科（訳語科または簡易科—2年制）にわけて医学教育をはじめることになった。この本科生のなかに高木兼寛をはじめ三田村一、加賀美光賢、河村豊洲らの秀才がそろっていた。彼らはのちに海軍に入り、ともに海軍軍医総監にまで累進した。

高木はこうしてウィリスからはじめて英国医学を学んだわけであるが、同時に彼は教員助手として（単独または通訳として講義を担当し）ウィリスの手助けもしていた。担当科目は解剖学であった。彼は薄給にもめげず、よく勉強し、よくウィリスを助けた。ウィリスは高木の給料の安いことをいつも憤慨し、給料の増額を申請する文書をしばしば藩庁

に提出していた（写真2）。その文書には「高木はいま解剖学を完全に会得し、その講師をつとめている。高木の価値は月額百両（円）を払っても安すぎるほどである。解剖学こそ医学の基礎である」と書かれていた。

ウィリスは医学書の類はほとんど英本国から取り寄せたというから、高木はそれらを次々と読破しながら貪るように新しい知識を吸収していったに違いない。高木のはげしい勉強ぶりはウィリスには大変驚異であつたらしく、こんな話のこっている。この医学校が開校してまだ間もないころ、ウィリスは高木の読んだ医書について試しに質問してみたところ、どの章を開いて質ねても、即座に明確な答えが返ってきたという。このことはウィリスにとってよほど印象深かつたらしく、後々の医学生にまで語り伝えている。高木をこの医学校の教員助手に抜擢したのも、動機はこのあたりにあつたのかもしれない。

ウィリスは、高木の非凡な才能のみならず、また彼の男らしくあつさりした性格を好んだ。他の日本人とちがって無用の秘密主義をとらず、陽気でひとなつこく、決めれば断固実行するといったところが好ましかつた。高木のような人物は、外国に渡つて、もっと広く深く勉強すべきであると考えて、英国留学をしばしばすすめるようになった。もちろん高木に異存があるはずはなく、彼はその近道として一先ず海軍にはいり、そこからの留学を計画することにした。

さいわいその頃、石神良策は鹿児島医学校を辞し海軍軍医寮の頭になっていたので、その招きで上京し、明治5年の春から海軍に出仕することになった。その後もウィリスは、高木の留学のために留学費の負担を申し出たり、鹿児島県派遣の留学生に推薦したりして積極的に尽力したが、結局いろいろの事情で高木は海軍からの留学生として英国に渡る事になった。

高木の留学先はセント・トーマス病院医学校であつた。この医学校での教育の形式は、鹿児島医学校でのウィリスか

Kagoshima  
December 27 1871.

二、  
The undersigned requests the  
Satsuma Authorities to give their  
most favourable consideration to the fol-  
lowing recommendations:  
That Mr. Takaki Toshiro be admitted  
to the second grades in rank in the  
Medical School and <sup>as Professor of English</sup> ~~that course and~~  
about the rice which is used. to  
rank that he receive a monthly  
salary of not less than twenty pi-  
nias in money as lecturer or assistant  
Mr. Takaki has studied with  
a zeal and ability which <sup>is</sup> ~~is~~ <sup>is</sup> ~~is~~  
common in the strongest ~~of~~ <sup>of</sup>  
the ~~of~~ <sup>of</sup> authorities.  
He has now completed a course  
of Anatomy & physiology knowledge  
of that most important subject  
which no native of Japan has ever  
yet acquired. He is now in rank.

ウィリスが薩摩藩庁に提出した高木兼寛の推薦状（下書き）

全部で7枚からなるが、これはその第1枚目、Kagoshima（鹿児島）、Satsuma Authorities（薩摩藩庁）、Mr. Takaki Toshiro（高木藤四郎）などの文字が見える。日付けは1871（明治4）年12月27日になっている。

ら受けたものと似ていたが、内容はずっと充実したものであった。高木はここでもよく勉強し、その成績は抜群であった（チェゼルデン金賞、銀賞をはじめ13の優秀賞、名誉賞を受けた）

この医学校で彼が最も大きい影響を受けたのはこの国で発展した疫学であった。この疫学の研究方法は、帰国後、脚気の研究に大いに役立った。高木の脚気の研究が現在でも「わが国の疫学研究の始まりであり、その整然とした内容は全く非のうちどころがない」といわれるのはそのためである。

### 高木医学の源流 —鹿児島医学校—

高木は明治13年の暮、5年の留学を終えて帰国した。帰国してまず痛切に感じたことは、医学界全体の好ましくない変貌であった。ウィリスの鹿児島下行にはじまる維新政府のドイツ医学導入の方針は、医学界全体の風潮をすっかりドイツ的気風に変えていた。医療よりも「研究を至上」とする気風であった。帰国早々、高木は英国医学の真髄である「医療を至上」とする風潮を中核に、矢継ぎ早に成医会講習所（東京慈恵会医科大学の前身）、有志共立東京病院（同大学付属病院の前身）、有志共立東京病院看護婦教育所（慈恵看護専門学校の前身）をつくっていった。

貧者のための施療病院 有志共立東京病院は、その名が示すように有志者が醸金してつくった施療病院であった。当時の日本はまだ貧しく、一旦病気になったら医者にはかかれず、死ぬしかない病人が溢れていた。高木らがつくった病院の設立趣意書にはこのように書かれていた。「人に幸不幸あり、時に遇不遇あり、これ天のしからしむるところ、貧にして病み、病んで療するあたわざる者を救うは、健康富裕の人、社会に尽くすの一義務たるを信ずるなり」「富める者は善意の徳を積み、貧しい者はその恩恵を受けて天寿を全うできれば、有志者の喜びこれに勝るものはない」。

高木が実際にこの病院の建設に着手したのはもちろん留学から帰ってからであるが、しかしその構想はすでに鹿児島医学校在学中にあったように思われる。高木がまだウィリスに師事していたころ、すでにウィリスも施療病院の必要性を喚起し、[貧者のための病院]なる覚書を県当局にしばしば提出していた。その覚書の中で彼はこのように述べている。「真に開花した国では、富裕な者は貧者を助けるものである。これは天の摂理である。貧者は医者にかかる余裕がなく高価な医薬を買うこともできない。…強者が弱者を助け、富める者が貧者をすくうのは義務ではないか。鹿児島の富める者、理解あるものは、無料でかかれる病院を是非つくるべきではないのか。精神の高潔さと資産の程度に応じて寄付されんことを切に願うものである」と。

さきの高木の病院設立の趣意書とこのウィリスの覚書があまりにもよく似ているのである。施療病院設立にたいする高木の想いは遠く鹿児島にあったように思われる。

医学生のための解剖学 ウィリスは基礎医学の実習にも力を注ぎ、とくに解剖学実習には自ら持参した人体模型をはじめ牛、豚、鶏などをしばしばもちいた。彼はさらに死体解剖の必要なことを県当局に訴え、ついにそれも許可させている。高木はこの死体解剖にもきわめて熱心であった。死刑人の解剖もやれば行倒人の解剖もやった（場所は鹿児島市鶴江崎海岸の稲荷川右岸であったといわれる）。当時世間からはずいぶん非難があったが、高木は学問のためだといって一向に取合わなかったといわれる。

このようなウィリスの教育的影響のためか、高木はセント・トーマス病院医学校でも、2学年になったとき解剖学の助教をつとめている。また帰国後つくった彼の医学校でも解剖学の教育はきわめて熱心であった（日本ではじめて学生に死体解剖をさせた）。明治14、5年ころの女子医学生の回想文にも、「そのころの女子学生は、男子学生に圧迫されて解剖の標本など十分にみることができないことがあったので、夜ひそかにちょうちんをつけて高輪の泉岳寺の墓地に行き、あそこで頭蓋骨を一つ、こちらで大腿骨を一つと、ひろい集めて家で勉強しました」と書き残されている。高木の医学教育にかける熱意が十分につたわってくる想いがする。

英語教育への執念 高木と英国医学との出会いは、英医・ウィリスの戊辰戦争における活躍と、これにつづく鹿児島への（苦渋にみちた）下行によって生まれた全くの偶然であったが、しかし、高木自身の「医の心」が英国医学の全人的医療の精神に共鳴したためか、彼は生涯この英国医学にこだわり続けた。高木の医学校の特徴は、よく知られたように、その英語教育にあった。医学校設立当時、英語、ドイツ語のいずれを正課にするかは文教上重要な問題であったが、高木は敢然として英語を選んだ（わが国唯一の英語医学校であった）。その理由を文部省にこう説明している。「ドイツ語は国内用の医師をつくるには適するが、国外用の医師をつくるには適さない。…すでに国際語である英語を学び、これによって知識を海外に求め、他方これによってわが医術の恩恵を全人類に浴させることこそ肝要である」と。

当時すでに東京大学を中心としたドイツ医学が医学界全体を覆っていたため、高木の医学校でもドイツ語を学びたい学生があふえ、学校側に無断でドイツ語の講習会を開いたことがあった。これを知った高木は、烈火のごとく怒り、ただちに解散させた。「英語は世界語であるから、まずこれを習熟せねばならぬ。ドイツのすぐれた業績はただちに英訳さ

れるから、英語のほかにドイツ語を学ぶ必要はない」というのがその理由であった。

高木の英語びいきは徹底したもので、教員の留学先でさえ英米にきまっていた。ある留学者の回想にも、「私が留学を命ぜられた時にも『英国に留学を命ず』であって、ドイツでないことはもちろんであります。どうも私は将来の医学は英語だけではどうかと思ひまして、先生（高木）に『どうかドイツのほうにもやっていたきたいのですが』とお願いすると、『ドイツに行きたいのなら自費で行け』と云われました」とある。

東京では一時期、「日本橋南はドイツ風吹かず」といった川柳のようなものが流行ったことがあった。東京大学をはじめ医学界全体にドイツ風が吹いていたなかで、日本橋から南だけはドイツ風が吹かない、ドイツ流の医者も、医学校も、病院も、そこにはないという意味であった。高木をはじめ英国医学を学んだ海軍軍医が、海軍病院（高輪）や海軍省（芝公園）に勤務し、またその近辺に居住していたこともあったが、何といても高木のつくった医学校、病院（芝愛宕町）で彼らの多くが華々しく活躍していたことが、その感をいっそう深くした（鹿児島医学校で高木と一緒にウィリスに師事した加賀美光賢や河村豊洲らも、この医学校、病院で教育、診療に従事していた。高木は診断学、臨床講義を、加賀美は外科学を、河村は臨床実習をそれぞれ受けもっていた）。

東京大学を中心に全国に広がるドイツ医学のピラミッド構造の中で、狭いとはいえ、この日本橋南の一画に英語医学の開放区を築き、懸命に維持、拡大しようとした精神は（学問の主体性を主張するという意味でも）高く評価すべきであろう。

米英医学が全国に広がっている現状を、もし高木が眺めたらどうであろう、面食らってしばらく言葉を失うのではないだろうか。

### 悲しい晩年

大正にはいつから高木は全国の小学校、中学校を中心にほとんど毎日のように保健・衛生の講演に出かけた。彼はこの新しい仕事に晩年の全情熱を傾けていた。そんな矢先（大正4年）、一人娘寛子が幼い子供（樋口一成、後の慈恵医大第6代学長）を残したままこの世を去った。高木の嘆き悲しみは想像以上であった。さらにそれに追い討ちをかけるように、こんどは（大正8年）将来に大きい期待をかけていた次男兼二、三男舜三がほとんど期を同じくして急死した。古稀をむかえた高木にはこれはあまりにも大きい試練であった。それまで多くの問題に勇敢に立ち向かってきた高木も、この度ばかりはいかんとも耐えようがなかった。彼はすっかり鬱病の状態になり、もはや生きる力を失ってしまった。大正9年3月、持病の腎炎が再発し、翌4月13日、家族、親族の看病のかいもなく、ついにこの世を去った。

この日、従二位に叙し、旭日大綬章が授与された（すでに大正4年に勲一等瑞宝章が授与されていた）。また彼はあまり知られていないが、日本最初の医学博士でもあった。